

今年度研修の特色

埋蔵文化財センターが自治体職員に対して行う研修は、一般研修、専門研修、特別研修の3本立てからなる。一般研修は発掘経験が十分でない職員を対象とするもので、今年度は5・6月に繰り上げて行った。専門研修と特別研修は、経験や実績がある職員に対し行う高度な、あるいは新分野に関する研修である。

研修棟の改修工事が遅れたこともあり、本年は課程数を減らし14課程を組んだ。遺跡測量、探査課程を休み、新たに生産遺跡調査・遺跡地図情報・近世城郭調査課程を設けた。

もとは希望者が多く定番だった遺跡測量、探査課程を休止した理由は、応募者の減少である。その背景には、遺跡の測量や探査を専門企業に外注するところが増えたことがある。それ自体は歓迎すべきであるが、ともに野外実習があり、ことに測量は日中に屋外で測量、夜に細かな計算といった厳しさが評判だった。厳しさが「若者」に敬遠されたとなると、喜んでばかりもいられない。

これと表裏の現象が一般研修であった。例年より約2月繰り上げたこともあって、社会人経験が2月、あるいは1年少々の研修生が定員30名の半数をしめた。学生気分が抜けない彼らには受け身の態度が強く、昨年より時間数を増やした実測実習ですら、要求が厳しく時間が足りない、と感想文にあった。

時間、すなわち勤務時間内に終るようにすべきだ、ということであろう。担当者としては、受講者が地元での発掘に困らない最低限の技術を、限られた時間で身に付けてもらうために苦慮したのだが。

「夜なべしてもやる」は、時代遅れの死語である。これからは超新々人類の時代、それを肝に銘じなければ。

新たに加えた特別研修は、おおむね好評であった。また、目的を持った研修生が多いため、一般研修のようなことは少なかった。生産遺跡調査課程では台風7号に打ちあひ、朱雀門に切り替えた現地見学でも、門の北のプレハブに閉じこめられること2時間半。講義内容は忘れても、その時の拳の雨風が研修の記憶として、残ることであろう。

(金子裕之)

京都大学大学院 人間・環境学研究科

奈文研が京都大学大学院人間・環境学研究科の客員講座（環境保全発展論）をうけもってから5年がすぎた。この5年のあいだに提出された修士論文は、以下の10篇を数える。

- ①宮路淳子「縄文時代の西日本における植物性食料貯蔵施設について —食糧貯蔵と生業形態との関わり—」（指導教官・松井章、1996年提出）
- ②坂田昌平「黒龍江省朝鮮族の居住空間に関する研究 —寧安市瀑布村でのフィールドワークから—」（指導教官・浅川滋男、1997年提出）
- ③北田裕行「律令制下における井戸祭祀の研究」（指導教官・町田章、1997年提出）
- ④石毛彩子「国分寺の維持経営 —東国国分寺跡の分析を中心に—」（指導教官・山中敏史、1998年提出）
- ⑤大山晃司「縄文時代の瀬戸内における水産資源の利用 —愛媛県江口貝塚出土の動物遺存体の分析を中心として—」（指導教官・松井章、1998年提出）
- ⑥小暮律子「材質および成形技法からみた古代ガラスの流通に関する研究」（指導教官・沢田正昭、1998年提出）
- ⑦神野 恵「伐採斧の出現とその背景 —先史社会の用途論—」（指導教官・光谷拓実、1999年提出）
- ⑧田邊由美子「関東地方における縄文時代後期の交易・交流の様相 —特に南房総地域と三浦半島・東京湾沿岸地域との関係について—」（指導教官・松井章、1999年提出）
- ⑨林 香織「弥生時代における動物利用の展開 —イノシシ類の飼育問題を中心に—」（指導教官・松井章、1999年提出）
- ⑩和田 浩「古代壁画の保存科学的研究」（指導教官・沢田正昭、1999年提出）

1998年度末に修士論文を提出したのは⑦～⑩の4名で、無事全員に修士号が授与され、うち3名が博士課程に進学した。博士課程に在籍する大学院生はあわせて7名となり、いずれの院生も博士論文の作成や留学などに意欲を燃やしているが、修士課程の学生も含めて、就職問題が大きな障壁となりつつある。

(浅川滋男)